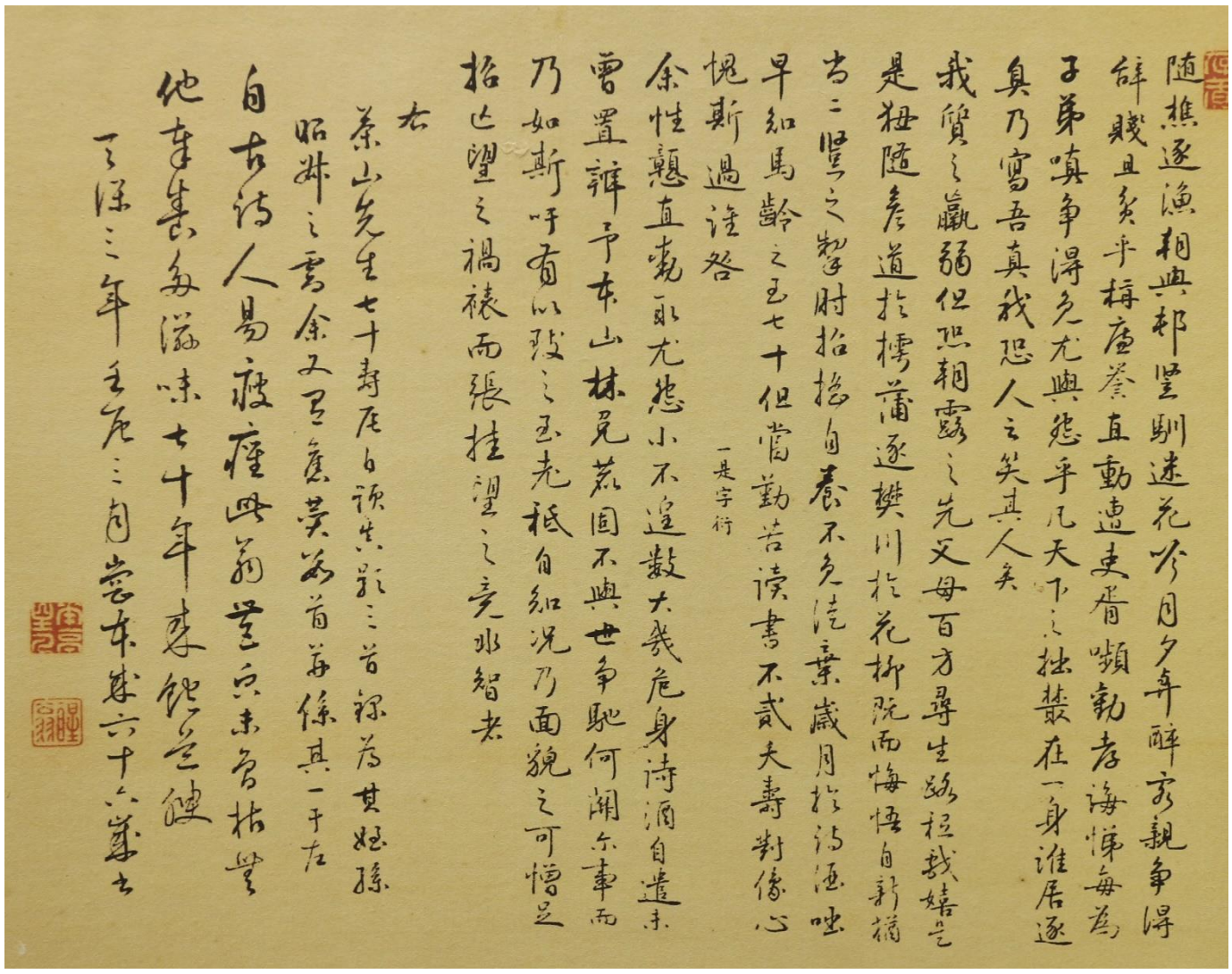
「菅茶山肖像画」岡本花亭賛　絹本着色　（複製）

この肖像画は菅茶山の七十歳の風貌が描かれる。画賛は茶山自らが人生を回顧した「自題画像」の文を岡本花亭が没後五年の天保三年（一八三二）に、姪孫の菅自牧斎の依頼に応じて書き入れている。肖像画の作者は不明である。



（部分拡大）

①樵に随い漁を逐うては、朝に郵竪と馴れ、花に迷い月を吟じて、夕に酔客と親しむ。争でか賤且つ貧を辞するを得んや。廉を称え直を誉めては、動もすれば吏宵の嘲に遭い、孝を勧め悌を誨えては、毎に子弟の嗔りと為る。争でか尤みと怨りを免るるを得んや。凡そ天下の拙は、叢て一身に在り。誰か居らんや。臭を逐い、乃ち吾が真を写せるは。我は恐る、人の其の人を笑うを。

②我が質の羸弱なる、但だ朝露の父母に先んずるを恐る。百方に生路を尋ね、祇だ戯嬉して是れ狃る。彦道樗蒲に随い、樊川に花柳を逐う。既にして悔悟し自ら新たにするも、猶お尚お二豎の肘を掣く。招揺にして自ら養うも、徒らに歳月を詩酒に棄つるも免れず。咄、早く馬齢の七十に至を知らば、但だ当に勤苦して書を読み夭寿を貳にせざるべきに、像に対して心に愧ずるも、斯く過ぐるを誰か咎めん。　一是字衍る

③余が性は戇直にして、動もずれば尤怨を取る。小は数うるに遑あらず、大は幾んど身を危うくす。詩酒自ら遣り、未だ曽て弁を置かず。予、本と山林兎鹿にして、固より世と争馳せず。何ぞ爾の事に関わらん。而るに乃ち斯くの如き。吁、以て之を致す有り。老に至って祇だ自ら知る。況や乃ち面貌の憎むべきは亡望の禍を招くに足るをや。裱して張り挂け、之を望めば竟に智者に非ず。

右

茶山先生七十寿辰、真影に自讃せる三首其の姪孫昭叔の需めの為に録す。余、又旧賛数首有り。并せて其の一を左に係る。

古より詩人は痩癯し易し。此翁の花貌、未だ曽て枯れざるは無し。

奉養を他いて滋味多くして、七十年来是に飽きて腴ゆ。

天保三年壬辰三月　崗本成六十六歳書す。

【出典】『黄葉夕陽村舎文』巻四所収

岡本花亭　（一七六八～一八五〇）名は成、字は子省、通称は忠次郎、号は花亭・豊洲・醒翁。江戸で生まれ、勘定奉行となり近江守に任ぜられた。文化十一年（一八一四）茶山の東遊のとき江戸で会い親しく交わっている。その後、会うことはなかったが茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』の中にもそのときの交友を偲び八首が詠まれている。

（菅茶山記念館作成）